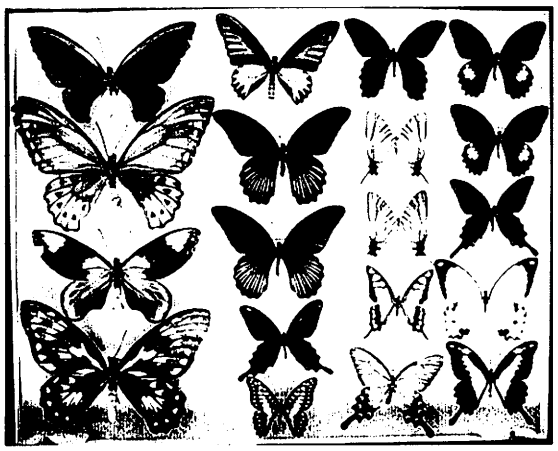
中標津町郷土館だより

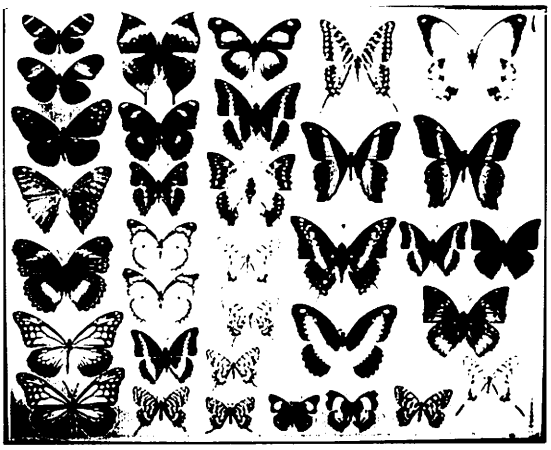
第14号

発　行　平成12年７月１日
発行所　中標津町教育委員会
　　標津郡中標津町丸山2丁目22番地
電　話　教育委員会(01537-3-3111)
　　郷　土　館(01537-2-2190)

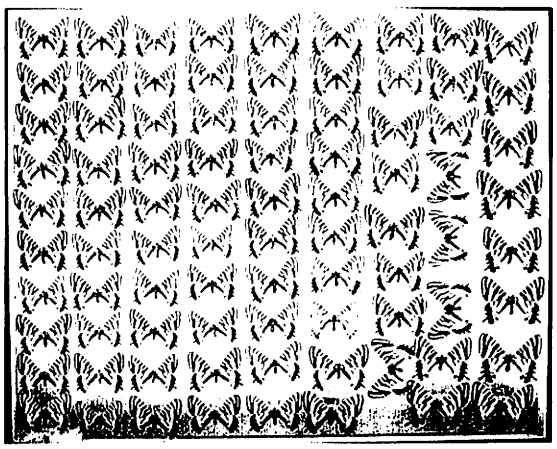
◆ 郷土館所蔵のチョウ ◆



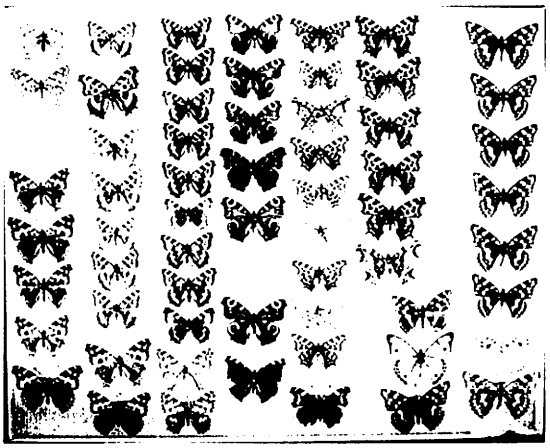
【外国産アゲハチョウ科】



【外国産タテハチョウ科、アゲハチョウ科】



【日本産アゲハチョウ科】

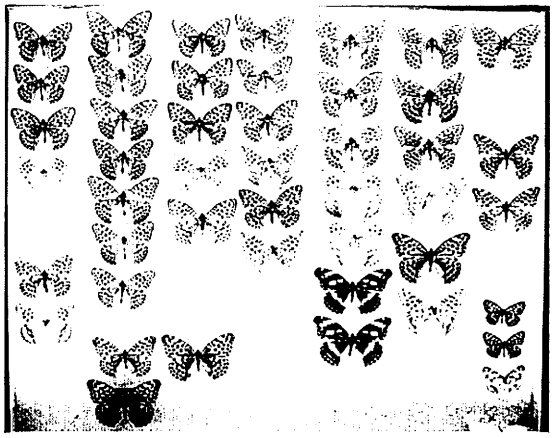


【日本産・外国産タテハチョウ科】

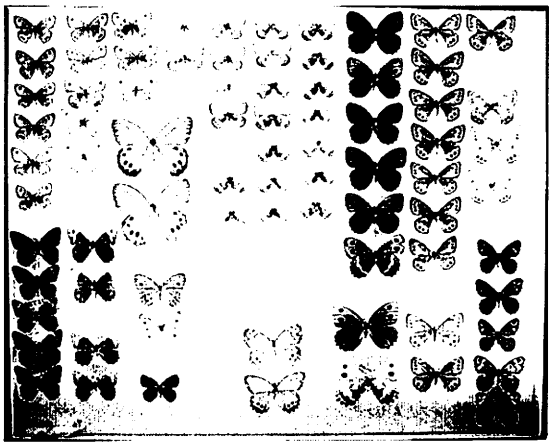
これらの標本は、1974（昭和49）年から78（昭和53）年まで中標津町に在住していた平岩康男さん（現札幌市在住）から平成11年度に寄贈を受けたものの一部です。

寄贈された標本1,689点中、チョウが1,564頭（日本産1,333頭、外国産231頭）と90％を超え、そのうち中標津町産のものが75種722頭と全体の半数近くを占めています。

日本国内で確認されているチョウ238種（註１）中、北海道では115種確認されており、そのうち道東では100種（註２）、中標津町内では83種（註３）が確認されています。　※迷蝶は除く



【日本産・外国産タテハチョウ科】



【日本産ジャノメチョウ科】

【日本産・外国産シジミチョウ科】

中標津町産のチョウ標本内訳

科　　目	町内確認	寄贈標本
アゲハチョウ科	6種	5種
シロチョウ科	7種	7種
シジミチョウ科	27種	24種
タテハチョウ科	25種	22種
ジャノメチョウ科	10種	9種
セセリチョウ科	8種	8種
合　　計	85種	75種

☆ 主な採集場所 ☆

1．東13条南10丁目付近
2．東中広域農道周辺(川沿通り)
3．緑ケ丘森林公園
4．武佐、当幌、開陽、協和地区
5．各山岳(標津岳、武佐岳、シタバヌプリ等)
6．各林道(クテクンベツ林道、俣落林道等)

これらのチョウは、1974(昭和 49)年～78(昭和 53)年という限定された時期に採集・確認されたものであるため、個体数の増減や繁殖場所については、当時とは異なっている可能性があります。また、さらに種が確認される可能性もあります。

次のページの一覧に載っていないチョウを町内で確認(採集)している方がいましたら、教育委員会生涯学習課までお知らせください。

☆ 注意 ☆

これらの標本は現在整理中のため、郷土館に常設展示されていません。見学希望者は郷土館までご連絡下さい。

註 1　『〈復刻版〉改訂増補　日本産蝶類大図鑑』、講談社、藤岡知夫、1997
註 2　『道東の昆虫』、釧路新書24、釧路昆虫同好会編、1999
註 3　「根室国中標津町産蝶類目録」『jezoensis No.26』、平岩康男、1999

中標津町産チョウ類一覧

Ⅰ　アゲハチョウ科

1．ウスバシロチョウ　○
2．ヒメウスバシロチョウ　○★
3．キアゲハ　○
4．ナミアゲハ／アゲハチョウ／アゲハ
5．カラスアゲハ　○
6．ミヤマカラスアゲハ　○

Ⅱ　シロチョウ科

7．エゾシロチョウ　○★
8．モンシロチョウ　○
9．エゾスジグロシロチョウ　○
10．スジグロシロチョウ　○
11．ツマキチョウ　○
12．エゾヒメシロチョウ　○★
13．モンキチョウ　○

Ⅲ　シジミチョウ科

14．ウラゴマダラシジミ　○
15．ウラキンシジミ
16．ムモンアカシジミ　○
17．アカシジミ　○
18．オナガシジミ　○
19．ウスイロオナガシジミ　○
20．ダイセンシジミ／ウラミスジシジミ　○
21．ミドリシジミ　○
22．メスアカミドリシジミ　○
23．アイノミドリシジミ　○
24．ウラジロミドリシジミ　○
25．オオミドリシジミ　○
26．エゾミドリシジミ　○
27．ジョウザンミドリシジミ　○
28．トラフシジミ　○
29．カラスシジミ　○
30．エゾリンゴシジミ
31．コツバメ　○
32．ベニシジミ　○
33．カバイロシジミ　○
34．ゴマシジミ　○
35．ルリシジミ　○
36．スギタニルリシジミ　○
37．ツバメシジミ　○
38．ヒメシジミ　○
39．アサマシジミ／イシダシジミ　○
40．カラフトルリシジミ（天然記念物）　★

Ⅳ　タテハチョウ科

41．ヒメカラフトヒョウモン　○
42．カラフトヒョウモン　○★
43．ナミヒョウモン／ヒョウモンチョウ　○
44．コヒョウモン　○
45．ウラギンスジヒョウモン　○
46．オオウラギンスジヒョウモン　○
47．ミドリヒョウモン　○
48．クモガタヒョウモン　○
49．メスグロヒョウモン　○
50．ウラギンヒョウモン　○
51．ギンボシヒョウモン　○
52．イチモンジチョウ　○
53．コミスジ　○
54．フタスジチョウ　○
55．サカハチチョウ　○
56．アカマダラ　○★
57．シータテハ　○
58．エルタテハ　○
59．ルリタテハ
60．キベリタテハ
61．クジャクチョウ　○
62．コヒオドシ　○
63．ヒメアカタテハ　○
64．アカタテハ
65．コムラサキ　○

Ⅴ　ジャノメチョウ科

66．ヒメウラナミジャノメ　○
67．ベニヒカゲ　○
68．ジャノメチョウ　○
69．ウラジャノメ　○
70．ヒメキマダラヒカゲ　○
71．クロヒカゲ　○
72．オオヒカゲ
73．ヤマキマダラヒカゲ　○
74．サトキマダラヒカゲ　○
75．シロオビヒメヒカゲ　○★

Ⅵ　セセリチョウ科

76．チャマダラセセリ　○
77．ミヤマセセリ　○
78．キバネセセリ　○
79．ギンイチモンジセセリ　○
80．カラフトタカネキマダラセセリ　○
81．コキマダラセセリ　○
82．コチャバネセセリ　○
83．オオチャバネセセリ　○

※　○＝標本のある種、★＝北海道特産種

ルチシを探して

～アイヌ語地名の調査～

中標津町内には、江戸時代から明治時代にかけて、標津川とケネカ川沿いに現在の標津町と斜里町を結ぶ「旧斜里山道」という山道がありました。

この山道は明治18年の廃止以降、山々の記憶からしだいに忘れ去られ、現在では一部を除き、そのほとんど分からなくなっていますが、その道中にはたくさんのアイヌ語地名がありました。

その中のひとつに「ルチシ」という場所がありました（註1)。ここはもともと斜里領と根室領の境界であったため、古い記録にもたびたび登場し、

(1) 1里塚があった

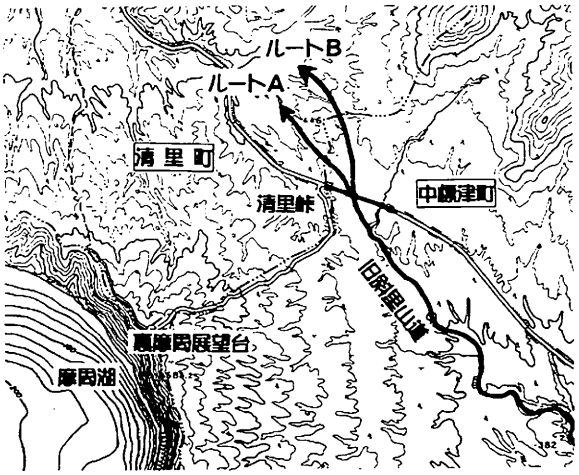
(2) 境界を示す杭があった

(3) トドマツ・エゾマツが多かった

(4) ここで休憩をとった人もいた

ことが分かっています。

場所は現在の清里峠付近で、2つのルートが想定されていました。（下図参照）



以前にルートAを調査した人に様子を聞いたところ、「道と思われる場所は狭く、急な坂続きのとてもキツイ行程で、馬が通れるような道ではなかった」とのことでした。

江戸時代の通行人数は十数人～百人以上と大人数で通行することが多く、場合によっては馬で行くこともありましたので、馬も通れないような道ではないはずです。そこで、今回はルートBの調査を行うことにしました。

調査は清里峠にあるスノーシェルター付近から始めました。このあたりにはまだ当時の道跡が残っているからです。

道跡をたどっていくと、しだいに笹が深くなります（腰くらいの高さ)。

ルチシと思われる付近。ここまで来ると道跡はまったく分かりません。写真の向こう側が清里町です。

笹は胸の高さまでありますので、周囲の地形はほとんど把握できない状況です。ただ、道さえあれば馬での通行は全く問題ないと思われます。

今回の調査でルチシがここであるという確証はつかめませんでしたが、少なくともルートAよりはこちらの方の可能性が高いことが分かりました。この辺一体の草刈でもすれば何か分かるかもしれませんが……

註1　ルチシ＜ruchis＞＝（峠）

※　元の意味はルー・チシ(路の・中央のくぼみ)

『地名探訪しゃり(郷土学習シリーズ第8集)』、1986年、斜里町立知床博物館

道　端　の　野　菜

◎ウラジロエゾイチゴ（バラ科）

木とも草とも見えるトゲトゲ枝状でツブツブの赤い実がついている植物といえば､｢おーあれか、バライチゴ｣と、その姿を頭の中に描くことができる人もいるだろう。

以前にこの欄でクサイチゴ(フレップ)について載せたことがあったが、私が子供のころは永年草地に数多くあったフレップをよく摘んで食べていた。一方のバライチゴは、荒地にもあり、数も少なくトゲもあるので「ヘビイチゴ」などと呼び、けっこうケーベツしていたように記憶している。他所では夏から初秋にかけて日当たりのよい野原にあったので、こちらを多く食べていたという方もいる。

味のほうは甘くなかなかのものである。

なぜヘビイチゴと呼んでいたのかははっきりしないが、やぶに生えているのでその場所によくヘビが出たり出そうだったり、また、あまり使い物にならない代名詞にもされ、ヘビ～という名前がつくらしい。実際にオオヘビイチゴという名の植物もあり、近くに大蛇でもいたのかこちらは食用に向かないとのこと。

このバライチゴがウラジロエゾイチゴという名前であることは今回まで調べていなかった。クラウンベリーという名を妻に聞き、格好よかったので使っていたのだが、きっと頭の片隅には｢ヘビイチゴだと格好悪い｣という思いがあったに違いない。

釣りが好きで山の中を歩いていると、色々と楽しいことがたくさんある。第一目的はあくまでも釣りなのだが、樹木や山菜、野鳥にも興味があると楽しさは広がり、根室地方の自然のすばらしさを堪能できる。住んでることに幸せを感じているのは私だけではあるまい。

実は、いつも実はなのだが､町内のあるところにおいて､魚釣りの最中にこのバライチゴを見つけた。発見時は少し遠くから見たので､｢なにやら赤いものが一面にあるが、いったい何だろう｣といった感じだったが、近くに寄ってみると、なんとバライチゴの大群落！。

あたりにも甘い香りが少し漂っている。ひとつつまんで口に入れると甘酸っぱい味が広がる。明日からはこのジャムが食卓を飾ると確信し、すぐさま竿を置きビニール袋を取り出し、きっとクマが見つけたらむさぼり食うのだろうなぁと思いながらセッセセッセとイチゴを摘んだ。それ以来、毎年裏切らずにたわわに実ってくれる赤いダイヤを袋にひとつ摘んでいる。

きれいにゴミを取ってさっと洗い、鍋に入れ砂糖を山盛りにかける。子供はあまりの美しさに垂涎のまなざしとなっている。この時点で食べても充分にうまいのだが、１粒だけ与え、あとは想像して我慢するように説得する。じわっと水分が出たところでじっくり煮る。レモン汁を加えてアクを取り、数時間後にトロトロになったところで火を止めて冷やす。後は小さな小ビンに分けて冷凍庫へ入れ、必要な分だけ溶かして食べる。

冷えたバライチゴのジャムは香ばしく力強い味がする。趣味と少しの知識は生活を豊かにする。ゼイタクはわりと身近にある。

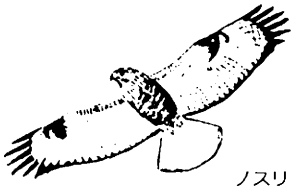
（文章：中標津町役場農林課　　西村　　穣）
（写真：北海道フラワーマスター　粟野　武夫）

中標津町の野鳥 ⑫

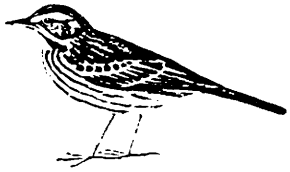
～ 緑ケ丘森林公園の鳥 ～

1．平成10年５～11年２月まで、全９回の調査において観察または鳴き声で確認されたもの。
2．同年の春と秋に実施した標識調査（バンディング）によって確認されたもの。

〔1．ガンカモ科〕
1．コガモ
〔2．ワシタカ科〕
2．トビ
3．ノスリ
〔3．シギ科〕
4．ヤマシギ
5．オオジシギ
〔4．ハト科〕
6．キジバト
7．アオバト
〔5．ホトトギス科〕
8．カッコウ
9．ツツドリ
〔6．アマツバメ科〕
10．アマツバメ
〔7．キツツキ科〕
11．アカゲラ
12．コアカゲラ
13．コゲラ
〔8．ヒバリ科〕
14．ヒバリ
〔9．ツバメ科〕
15．ショウドウツバメ
〔10．セキレイ科〕
16．ハクセキレイ
17．ビンズイ
〔11．ヒヨドリ科〕
18．ヒヨドリ
〔12．モズ科〕
19．モズ
〔13．ミソサザイ科〕
20．ミソサザイ
〔14-1．ヒタキ科ツグミ亜科〕
21．コルリ
22．ルリビタキ
23．ノビタキ
24．クロツグミ
25．アカハラ
26．ツグミ


ノスリ

アマツバメ


ビンズイ

アカハラ

〔14-2．ヒタキ科ウグイス亜科〕
27．ヤブサメ
28．ウクイス
29．エゾセンニュウ
30．シマセンニュウ
31．エゾムシクイ
32．センダイムシクイ
33．キクイタダキ
〔14-3．ヒタキ科ヒタキ亜科〕
34．キビタキ
35．オオルリ
36．コサメビタキ
〔15．エナガ科〕
37．エナガ
〔16．カラ科〕
38．ハシブトガラ
39．ヒガラ
40．シジュウカラ
〔17．ゴジュウカラ科〕
41．ゴジュウカラ
〔18．キバシリ科〕
42．キバシリ
〔19．メジロ科〕
43．メジロ
〔20．ホオジロ科〕
44．アオジ
45．クロジ
〔21．アトリ科〕
46．カワラヒワ
47．ベニマシコ
48．シメ
〔22．ハタオリドリ科〕
49．スズメ
50．ニュウナイスズメ
〔23．ムクドリ科〕
51．コムクドリ
〔24．カラス科〕
52．カラス
53．ハシブトガラス
54．ハシボソガラス

ヤブサメ

キビタキ

メジロ

シメ

以上24科 54種 1,740個体が確認されました。

同年に調査された丸山公園（20科 42種 587個体）や標津川河川敷（24科 60種 959個体）と比べると科・種類は少ないものの、個体数は倍近い数字となっています。市街地からも近いので、この公園は野山の鳥に出会うには最適の場所といえます。

（図：『フィールドガイド日本の野鳥』、高野伸二著、（財）日本野鳥の会）

！根室地方の昔話！

蛇の恩返し　青姫明神

この話は、標津町で大正時代に実際にあったできごとです。

標津町内でもっとも古くから旅館を経営している宮嶋旅館のおばあさん（もう亡くなられています）は、ある日、部屋の縁側に座って庭をながめていました。

庭には赤、黄色、ピンクや白などの色々な花が咲き、花畑のそばの草むらもきれいな緑色です。空はよく晴れ、時々海のほうからさわやかな風が吹いていました。

「あれ！、あれ！、何でしょう。」

縁側の近くの草の中で何か動いています。カサコソ、カサコソ…とそこだけ草がゆれて、何かいるようでした。

おばあさんは目を凝らしてよく見ました。なんとなんとヘビがいるではありませんか。ビクッとしたおばあさんがもう一度よく見ますと、それは青大将といって毒のないヘビの子どもでした。

ヘビは頭をちょっとあげて、ゆっくりとおばあさんを見ました。おばあさんは話しかけられているように思いました。

「おなかが空いているの？」

おばあさんは気になって、小さいお皿にお米を少し入れて、草むらにそっと置いてやりました。

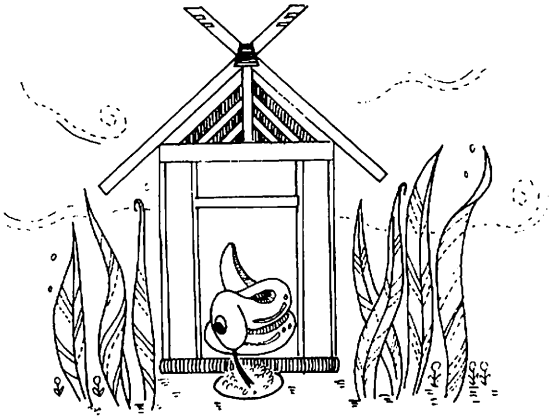
はじめは近寄ってこなかったヘビも、しだいになれてお米を食べるようになりました。おばあさんはうれしくなって、お米を小さなお皿に入れて草むらに置いてあげるようになりました。

「ヘビさんやお食べ、たくさんたくさんお食べ！」

お米をあげることが、おばあさんの楽しみのひとつになりました。

小さくてかわいかったヘビの子どもは、だんだん体が大きくなってきました。寝ているときには「グー、グー」といびきをかくときもあって、人目につくようになってきました。

「人に見つからなければいいんだけど…、いつまでもこの家にいてくれるといいんだけど…。」



おばあさんは心配でたまりません。

「そうだわ、おじいさんに頼んで、ヘビさんのお家を作ってもらいましょう。ヘビさんに合うかわいいお家がいいわ。」

おばあさんはとってもいい事を思いついたと、ごきげんで、さっそくおじいさんにわけを話し、かわいい家を作ってくれるように頼みました。

器用なおじいさんは、すぐに板切れを集めてトーントントン…。

まもなく、立派なほこらがヘビさんの来る所に置かれました。おばあさんは、ヘビさんもきっと喜んでくれると思って、たいそう満足しました。

それから何日かたちました…。

ある晩のことです。おばあさんが寝ていると、美しい着物にはかまをつけて、神様のような格好をしたヘビさん枕元に立ちました。

「おばあさん、いつもおいしいお米をありがとう。また立派なほこらを建ててくれてありがとう。とてもうれしかったです。でも、わたしは体が大きくなってほこらが小さくなりました。迷惑をかけるといけないので、わたしは近くの沼に移りますね。おばあさん、ありがとう。」(今の標津小・中学校やグラウンドのあたりはその昔、沼でした。)

おばあさんはびっくりして声が出ませんでした。引き止めて家にいてもらいたいと思うのに、声が出ませんでした。

その後、庭でヘビを見ることはありませんでした。おばあさんはがっかりして、縁側でぼんやりしていることが多くなりましたが、時々ヘビさんが戻って

きているのではないかと、よく庭を見たり、お米をお皿に入れてほこらの前に置いてやりました。でも、お米を食べる様子はありませんでした。

そして、また何日も何日も、さらに何日も何日もたちました。

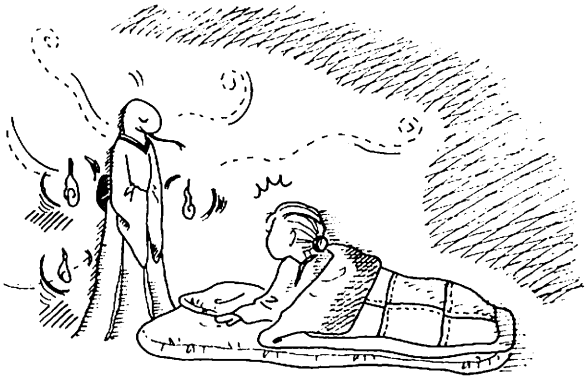
大正10年のことです。6月に毎日毎日雨が降り続きました。こんなことはかつてないことでした。あまりたくさん降るので、街の裏通りを流れているアキラ川は水があふれ、道路も水浸しになりました。

その頃標津小学校は、今の役場の所にありました。道路は水浸しで、学校へは歩いていけなかったそうです。おばあさんの宮嶋旅館や、ヘビが移っていった沼のあたりは、舟を利用しなければならないほど水があふれていました。

洪水がまだおさまらない夜のことでした。おばあさんの枕元に、かわいがっていたヘビさんがまた現れました。前よりもまた大きくなっています。おばあさんはまた声が出ませんでした。

「おばあさん、わたしはまた体が大きくなりました。沼がせまくなったので、今度は海へ行くことにしました。海へ行くために雨をたくさん降らせて、みなさんにすっかり迷惑をかけてしまって悪かったと思います。

おばあさん長い間ありがとう。お元気で！さようなら。」



おじいさんとおばあさんは、ヘビさんが住んでいたほこらを「みどり姫明神」として庭におき、ずっと祭っていたのですが、ヘビさんが海へ行くと言ったあとは、標津神社にまつってもらうことにしました。標津神社では、青大将なので青姫と名づけ、魂入れをして神社の神様といっしょにまつりました。

それから6年たった昭和3年10月のことでした。ある日、それはそれは風の強い日のことでありました。夜になってある家が火事になりました。強い風にあおられて、たちまち火事は広がりました。茶志骨の方からも大勢の人がかけつけて、みんなで消そうとしましたが間に合わず、標津市街に156軒あった家のうち53軒が焼けてしまいました。

宮嶋旅館のまわりの家もみんな焼けてしまいました。おじいさんとおばあさんは恐ろしい夜をすごしましたが、不思議に宮嶋旅館は焼けませんでした。

次の日の朝、家のまわりのようすを見ていたおじいさんとおばあさんは、

「あっ、これは！」

とおどろきの声をあげました。家のまわりには、大きなヘビのはったあとがグルグルとついていたのです。

火事のときにヘビが家のまわりをまわって火を防いだと、近所でも大評判になりました。

おじいさんとおばあさんは、大へん感謝し、青姫明神のおまつりをずっと欠かさなかったということです。

(本多克代、『ふるさとねむろの豆本シリーズ③ 伝説・海鳴りの彼方に』、北ぐに出版社、1991を要約)

～ 編集後記 ～

先日、20年ぶりにシジミチョウの展翅をしました。小中学生の頃毎日のようにチョウを追いかけ、展翅をしていたので、ブランクがあっても大丈夫だろうと思っていたのですが、こういった作業をしばらくしておらず、また、自分の指が太くなったためか（単に鈍くなったためか）、チョウを持った時の感覚が当時と全く違うことに気づき愕然としました。

今号作成にあたっての依頼を快くお引き受けいただいた西村氏、粟野氏、佐瀬氏には厚く御礼申し上げます。